

昭和28年6月28日門司大災害の記録

あの日から50年



平成16年3月
福岡県土木部砂防課

はじめに

昭和 28 年 6 月、九州中北部は百年に一度ともいわれる記録的な豪雨に見舞われた。

特に、門司市(当時)では、6 月上旬の雨で地盤が緩んだところに、28 日に日雨量 398.3 ヲ(時間雨量 77.6 ヲ)という記録的な豪雨に襲われた。この集中豪雨によって門司市街の背後に連なる風師山、戸ノ上山の斜面がつぎつぎに山腹崩壊をおこし、土石流となって市街地へなだれ込み、死者・行方不明者 143 人、被災家屋 15,910 戸という、県政史上最も大きな被害をもたらした。

平成 15 年は、昭和 28 年の門司大災害から 50 年目を迎える年であった。半世紀を経た現在においても「門司大災害」の記憶を風化させず、土砂災害の危険性を忘れないために、福岡県土木部と福岡県砂防協会が共催して平成 15 年 6 月に <昭和 28 年「門司大災害」の記憶をたどる写真・資料展> を開催した。本誌は、この写真・資料展の開催にあたり、50 年目に収集した当時の災害写真・資料を収録したものである。

福岡県下では、昭和 28 年の西日本大水害のあと、昭和 38 年の早良土石流災害、昭和 48 年の宝満山土石流災害など、10 年に一度大きな災害が発生している。また、平成 2 年の県南部豪雨災害、平成 3 年には台風 17 号 19 号による災害が続けて発生し、最近では平成 11 年の福岡水害の記憶が生々しい。さらに、昨年(平成 15 年) 7 月 19 日には、福岡県太宰府市を中心に 1 時間 100 ヲを超える集中豪雨が発生し、福岡市博多駅周辺や飯塚市で河川の氾濫による大規模な浸水被害が発生するとともに、各地で土石流災害が発生し、太宰府市では土石流によって 1 人の方が亡くなられた。

昔から「災害は忘れた頃にやってくる」、「備えあれば憂いなし」と言われているが、まさにそれは現実が示すところでもあり、防災に携わる者だけでなく、県民が等しく心に止めておかなければならないことである。

本誌が、土砂災害などの防災について、改めて考えていただく契機となれば幸いである。

目 次

1. 門司災害の概要.....	1
2. 気象状況.....	2
2.1 気象概況.....	2
2.2 災害発生までの気象経過.....	3
3. 被害状況.....	4
3.1 被害の概要.....	4
3.2 土石流発生の過程.....	7
4. 被害状況の記録.....	9
4.1 被害状況写真.....	9
4.2 災害体験記.....	22
5. 復旧状況.....	24
5.1 砂防施設の建設計画.....	24
5.2 砂防施設の現状.....	28
5.3 災害当時との比較写真.....	29
6. 門司大災害の記憶をたどる写真・資料展.....	42
6.1 写真・資料展.....	43
6.2 公開講演会.....	45
6.3 アンケート調査結果.....	46

1. 門司災害の概要

昭和 28 年の北部九州は、梅雨期に断続的に強い降雨に見舞われ、6 月下旬の梅雨末期には 24 日から 29 日にかけて、福岡、佐賀、長崎、熊本及び大分県下で 500 ミリ以上の記録的な豪雨が観測された。この雨によって、北部九州の主な河川は堤防の決壊による氾濫を起こし、山間部では各地で土砂災害が発生した。この雨による被害は、死者・行方不明者 976 人、全半壊家屋 4 万 5 千戸、浸水家屋 42 万戸、流出埋没田畑 6 万 ha、冠水面積 40 万 ha に達し、記録的な大災害となった。

その頃、門司市（当時）では、25 日から 28 日までの 4 日間に 646.1 ミリの雨を観測し、門司市街地の背後に連なる風師山、戸ノ上山系の山々が相次いで山腹崩壊を起こし、土石流となって市街地に襲いかかった。市内の山腹崩壊は 620 箇所及び、門司市の死者・行方不明者は 143 人に上り、全壊・流出家屋 616 戸の大被害を受けた。その時流れ出た土砂は門司港に流出して、海の色を茶色に変色させたと言われている。また、関門国道トンネルや鉄道トンネルにも大量の土砂を含んだ濁流が流れ込み、復旧作業のために 3 週間を要するなど、甚大な被害をもたらした。

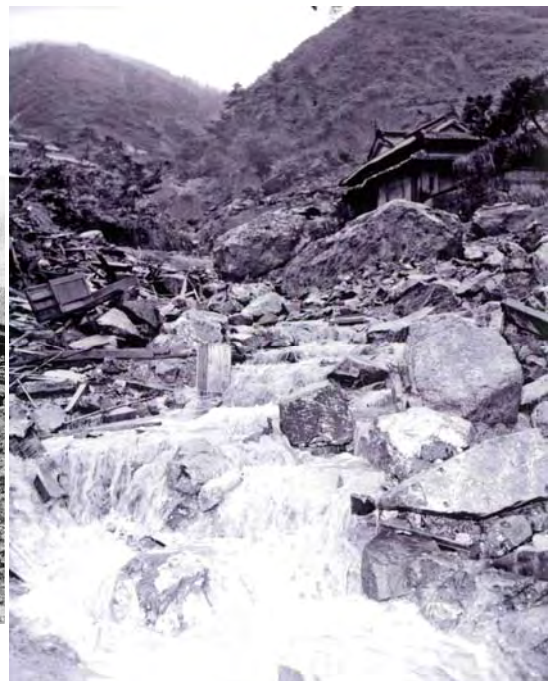


濁流渦巻く大里地区

撮影：朝日新聞社



被災地から見る関門海峡



土石流に埋まる白木崎

撮影：毎日新聞社

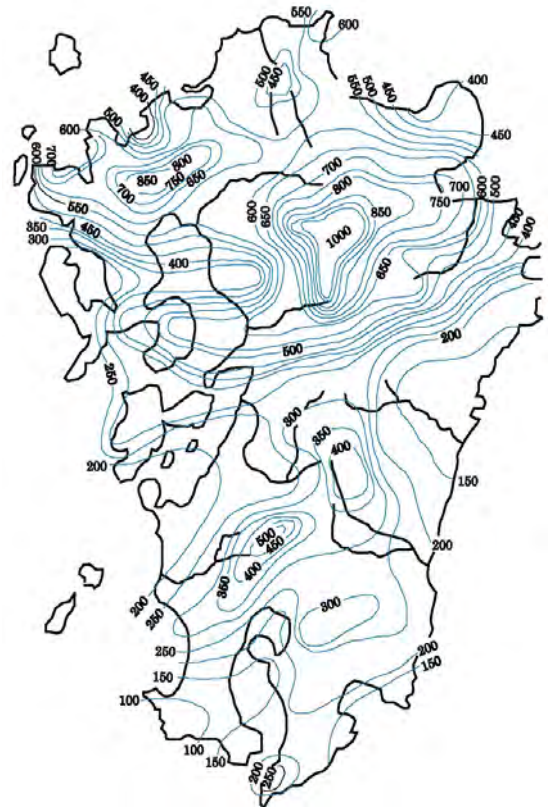
2. 気象状況

2.1 気象概況

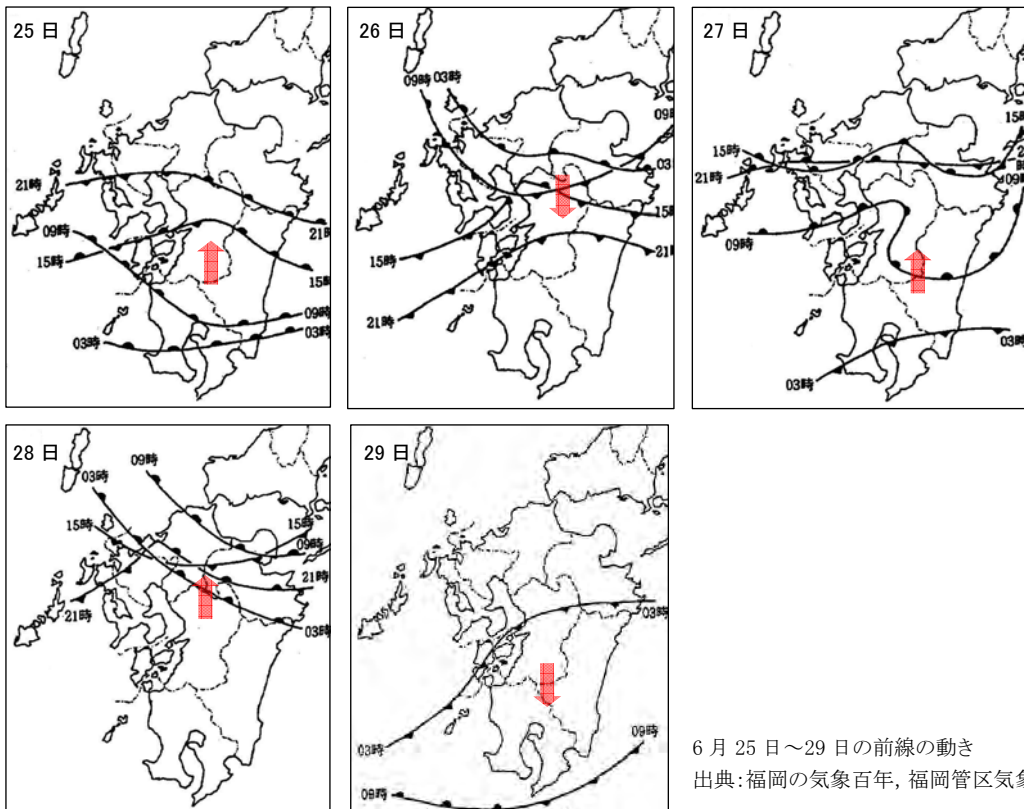
昭和 28 年は、5 月下旬からすでに梅雨の走りが現れ、ひと雨で 100 ミリ以上の降雨が 7 回観測されている。しかも、梅雨前線の活動域が九州北部に集中しており、北部九州の降雨量は平年の 4~5 倍に達していた。

6 月に入ると、上旬に大雨を降らせた梅雨前線は、奄美大島付近まで南下して小康状態になったが、6 月中旬には九州中部まで北上し、太平洋高気圧も勢力を強めてきた。

大災害発生の原因となった 6 月下旬の前線の動きを見ると、6 月 25 日に低気圧が朝鮮半島南部に進み、前線は北部九州まで北上した。この影響で福岡県下では午後から大雨となった。その後、前線は九州の中部と北部を南北にゆっくり上下し、ときには停滞して 29 日早朝に九州南部まで南下した。この間、日本海の冷たい高気圧と太平洋高気圧の勢力がともに強く、九州に停滞していた梅雨前線に南西の湿った空気が流れ込み、九州北部・中部で 500 ミリを超える豪雨となった。



昭和 28 年 6 月 24 日~29 日間の累加雨量分布(mm)
出典:昭和 28 年西日本水害調査報告書, 土木学会西部支部



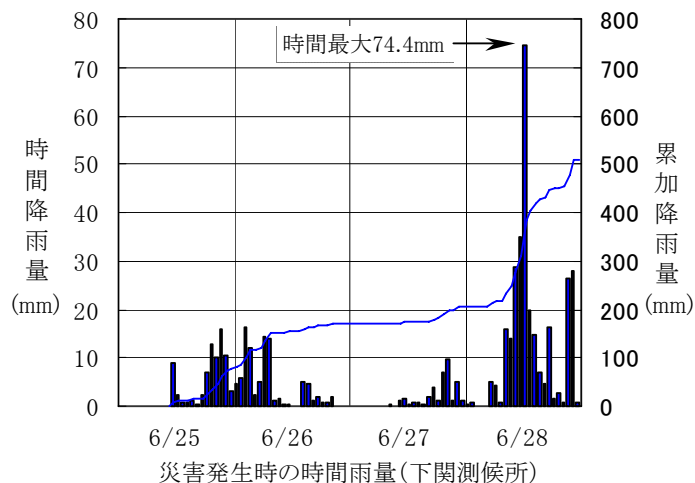
6 月 25 日~29 日の前線の動き
出典:福岡の気象百年, 福岡管区气象台

2.2 災害発生までの気象経過

土木学会西部支部がとりまとめた「昭和 28 年西日本水害調査報告書」によると、門司市風師山に近い小森江観測所では、降り始めの 6 月 25 日は 167 ミリで、26 日 24.8 ミリ、27 日 56 ミリと降り続き、28 日には 398.3 ミリを記録した。この雨の連続降雨量は 646.1 ミリに達し、特に 28 日には午前 11 時から 12 時までの 1 時間に 77.6 ミリの雨量を観測、過去最大の 1 時間雨量を記録した。

(右は下関測候所(当時)の時間雨量記録)

記録的な豪雨の発生に伴い、福岡管区気象台下関測候所(当時)は、25 日夕刻から断続的に大雨注意報・警報を発令、28 日には大雨警報に続いて大雨情報を 4 回発表し、嚴重な警戒を呼びかけた。



下関測候所(当時)が発表した注意報・警報

時間経過	発令状況	概況
6月25日 18時10分	大雨注意報	降雨量 100 ミリ～150 ミリで崖崩れや水害の恐れ
6月26日 6時	大雨警報	引き続き 100 ミリ～150 ミリの予想
11時20分	大雨警報解除	
6月27日 17時	大雨注意報	降雨量 150 ミリ～200 ミリで大きな災害の恐れ
6月28日 10時30分	大雨警報	100 ミリ～150 ミリ, 崖崩れ・浸水・河川の氾濫の恐れ
13時	大雨情報第1号	100 ミリ～150 ミリ, 嚴重な警戒が必要
16時	大雨情報第2号	70 ミリ～80 ミリ, 嚴重な警戒が必要
18時50分	大雨情報第3号	50 ミリ～70 ミリ, 注意が必要
20時	大雨注意報	
22時	大雨情報第4号	
6月29日 0時30分	大雨情報第5号	
1時	大雨注意報解除	

昭和 28 年 6 月下旬の各地の日雨量

(mm)

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	累計
門司	0	167.0	24.8	56.0	398.3	0	646.1
飯塚	0.7	235.5	13.6	105.9	132.3	3.9	491.9
福岡	0.9	307.8	25.7	119.9	168.0	1.2	623.5
矢部	9.4	395.0	168.4	142.6	218.6	10.0	944.0
久留米	7.0	317.2	89.1	87.2	61.8	5.4	567.7
日田	11.3	292.4	129.8	178.7	99.0	5.5	716.7

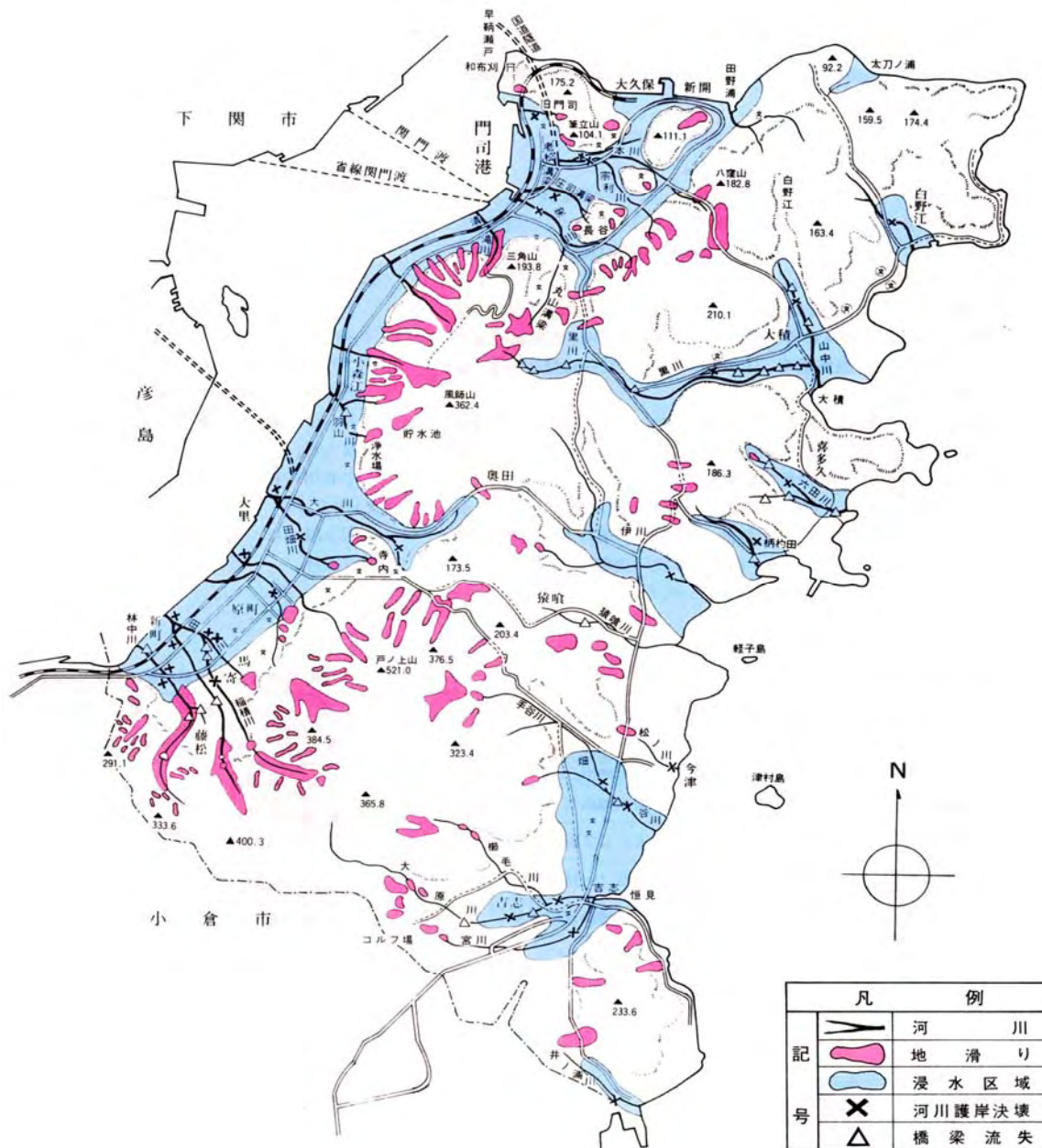
出典:昭和 28 年西日本水害調査報告書:土木学会西部支部

3. 被害状況

3.1 被害の概要

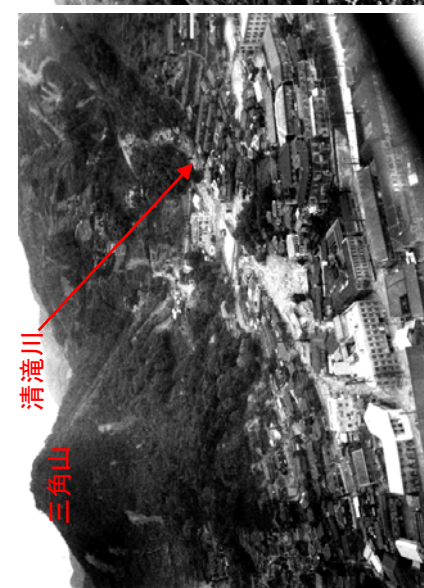
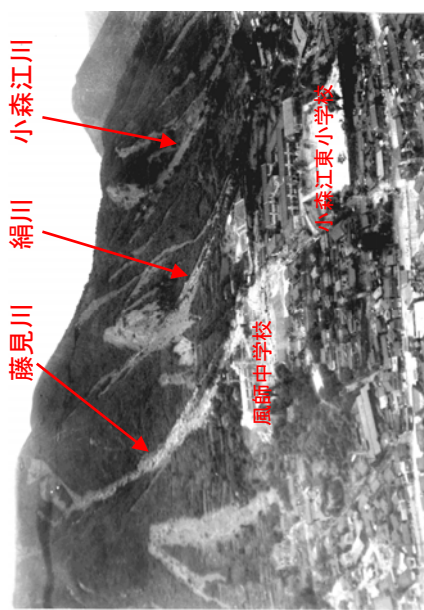
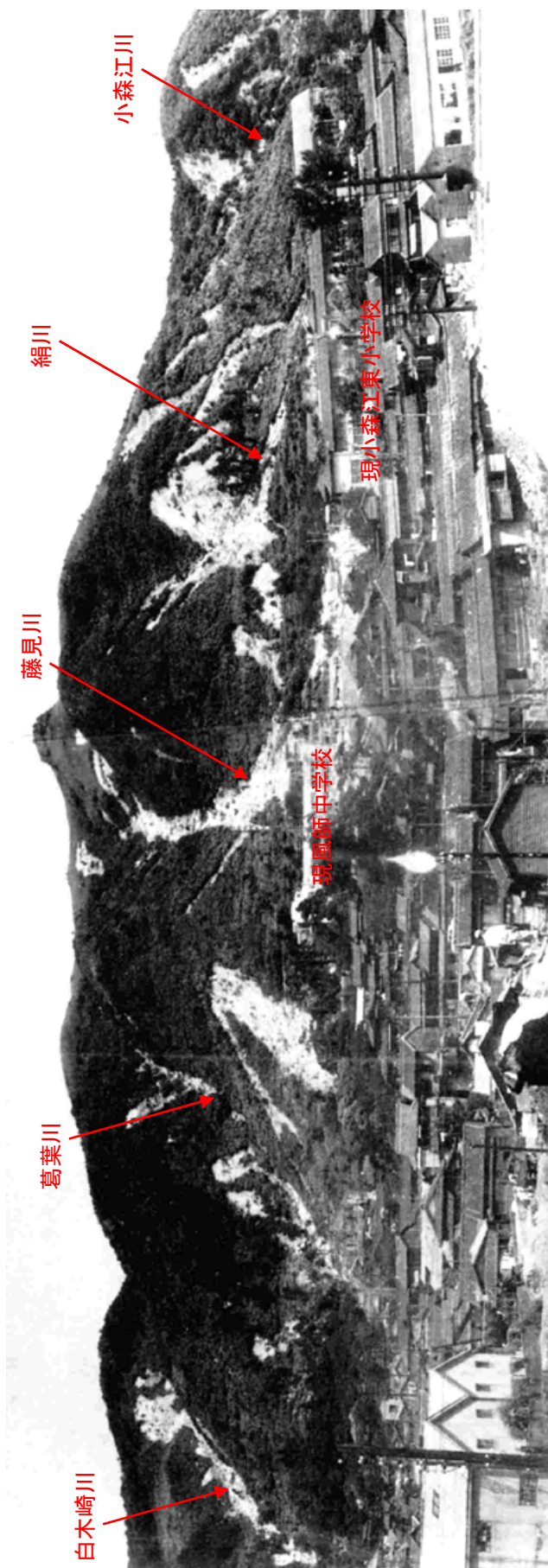
6月28日、時間雨量77.6㍓の豪雨が襲った午前11時20分頃、門司市街地の背後に迫る風師山の斜面が轟音と共に相次いで崩壊し、土石流となって市街地に襲いかかった。土石流は大地を揺るがす山鳴りとともに、一瞬にして住居を押し流し、路面電車の軌道を越えてすさまじい破壊力で工場群を直撃、甚大な被害をもたらした。この間、約30分足らずの出来事であったと言われている。

市内の山腹崩壊は620箇所及び、土砂は門司港域にも流出して、船舶の係船もできない状況であった。国道3号をはじめとする市内の道路は各地で寸断され、関門国道トンネルも水没、交通は完全に途絶状態となった。



門司市(当時)の被害箇所

出典:昭和28年北九州大水害写真集(北九州市)



撮影：西日本新聞社

災害直後の風師山北部および北西部の斜面

撮影：西日本新聞社

門司市での死者は、大規模な土石流が発生した小森江東、広石・清滝、丸山地区に集中し、最終的に死者 139 人、行方不明者 4 人、負傷者 477 人に上った。門司市の罹災者は 7,000 人を超え、市内 40 箇所の避難所で数日間の避難生活を余儀なくされた。

豪雨による道路・河川の決壊埋没は約 200 箇所に及び、復旧作業には、警察、消防、自衛隊、米駐留軍や関西・中国の他市職員の応援を得て、7 月一杯の期間を要した。

家屋の被害額は 17 億円（当時）に達し、農地や施設等の被害を含めると推定被害総額は 43 億円とされている。これを現在の被害額に換算^{注 1)}すると 227 億円に上る。

門司市校區別死者数

校區別	死者数	校區別	死者数	校區別	死者数	校區別	死者数
西門司	7	小森江東	45	古城	2	柄杓田	0
大里柳	0	錦町	24	清見	6	松ヶ江南	1
大里東	1	丸山	17	田ノ浦	9	松ヶ江北	0
萩ヶ丘	2	門司	5	白野江	6		
小森江西	0	庄司	0	大積	12	計	137

注)校區別集計値は昭和 28 年 7 月 28 日時点の数字である。

被害集計

災害種別		被害数量	推定被害額	災害種別		被害数量	推定被害額	
人	死亡者	139 ^人		耕 地	流失	40 ^町	27,896 ^{千円}	
	負傷者	477			埋没	157	192,780	
	行方不明者	4			冠水	153	2,355	
	計	620			浸水	190	950	
			計		540	223,981		
家 屋	住 家	流失	69 ^戸	34,500 ^{千円}	道路	決壊埋没等	82 ^{ヶ所}	216,769
		全壊	547	272,000	河川	決壊埋没等	123	1,050,815
		半壊	1,923	480,000	橋梁	流失	45	47,000
		床上浸水	4,406	132,180	山腹崖等	崩壊(林道含む)	620	698,292
		床下浸水	7,382	73,820	港湾	土砂堆積等	8	84,234
		小計	14,327	992,500	公園	崩壊等	4	30,440
	非 住 家	全壊	121		上水道	損壊等	—	78,722
		半壊	110	693,881	学校	流失埋没等	36	94,853
		浸水	1,358		屠場等	損壊	7	15,000
		小計	1,589	693,881	蔬菜	流失等	48 ^町	24,050
計	15,910	1,686,381	保管物質	浸水	11	91,967		
				総計			4,342,504	

出典：昭和 28 年北九州大水害写真集（北九州市）

注 1) 水害被害額デフレーター（国土交通省河川局：H14.12）

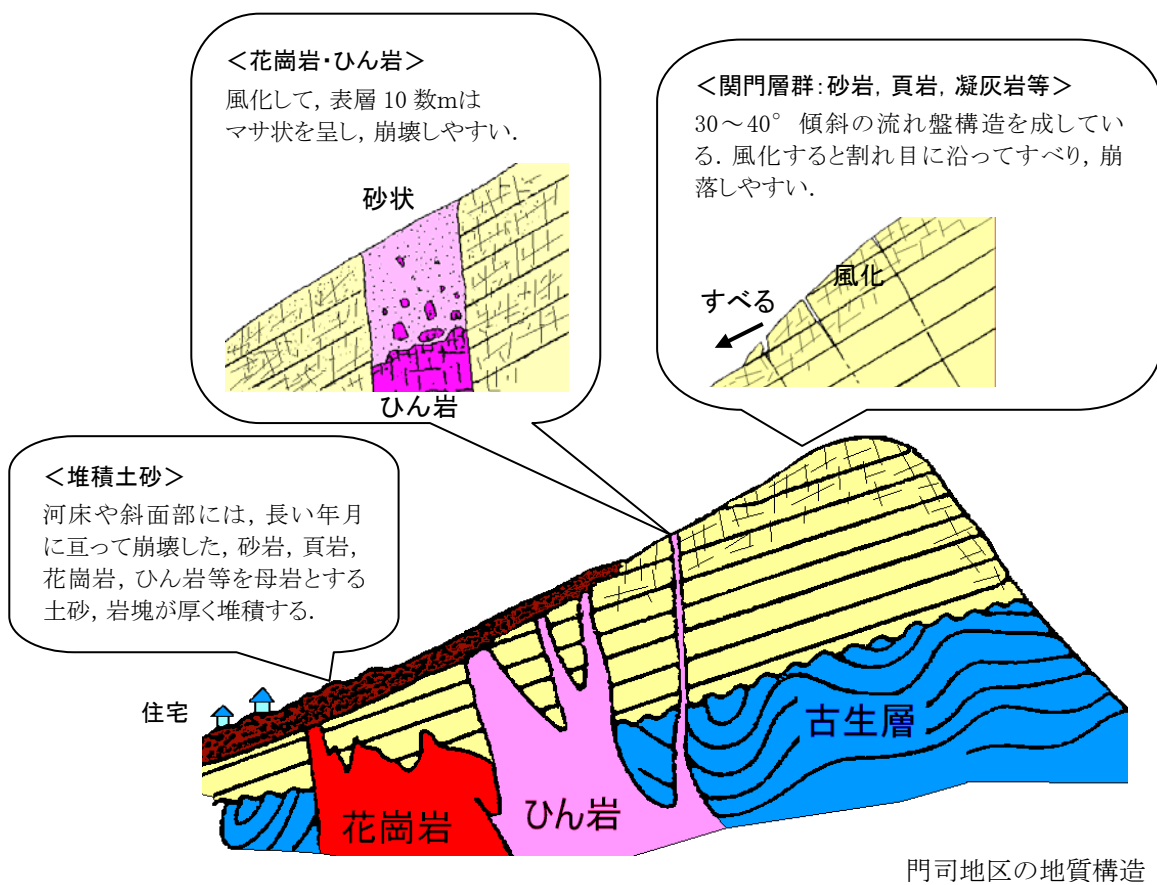
3.2 土石流発生過程

(1) 大災害の地形・地質的要因

北九州市門司区は、九州最北端の企救半島に位置する。門司区南西部は標高 400m～500 mの山地で小倉北区に接しており、海岸に向かって急勾配の斜面が集中する。

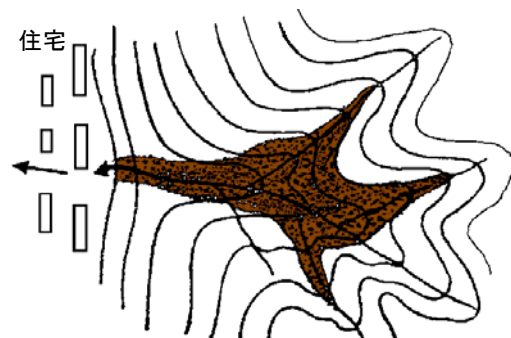
門司区の地質は、上部古生界呼野層群と、これを被う下部白亜系関門層群、そしてこれらを貫く大小多数の角閃石ひん岩の岩脈と花崗岩類からなる。

土石流被害の激しかった企救半島北西部には、関門層群が 30°～40° の急傾斜で分布しており、地形も急峻である。関門層群は、柱状節理の発達した砂岩・珪質凝灰岩などを主体とし、軟らかな頁岩・凝灰岩を挟んでいるため、風化が進行すると割れ目沿いに滑って崩落しやすい構造（流れ盤構造）である。また、これらを貫く火成岩類の岩脈も、風化が著しくマサ化しているため、容易に崩落を生じる状態であった。



(2) 地形・植生上の特徴

斜面を刻む谷は、節理面からはく離・崩落した岩塊や多量の土砂で埋められた荒谷となった。斜面には笹類が密生しているものの、裸地に近い状態で保水力がなく、雨により表土が流されやすい状態であった。



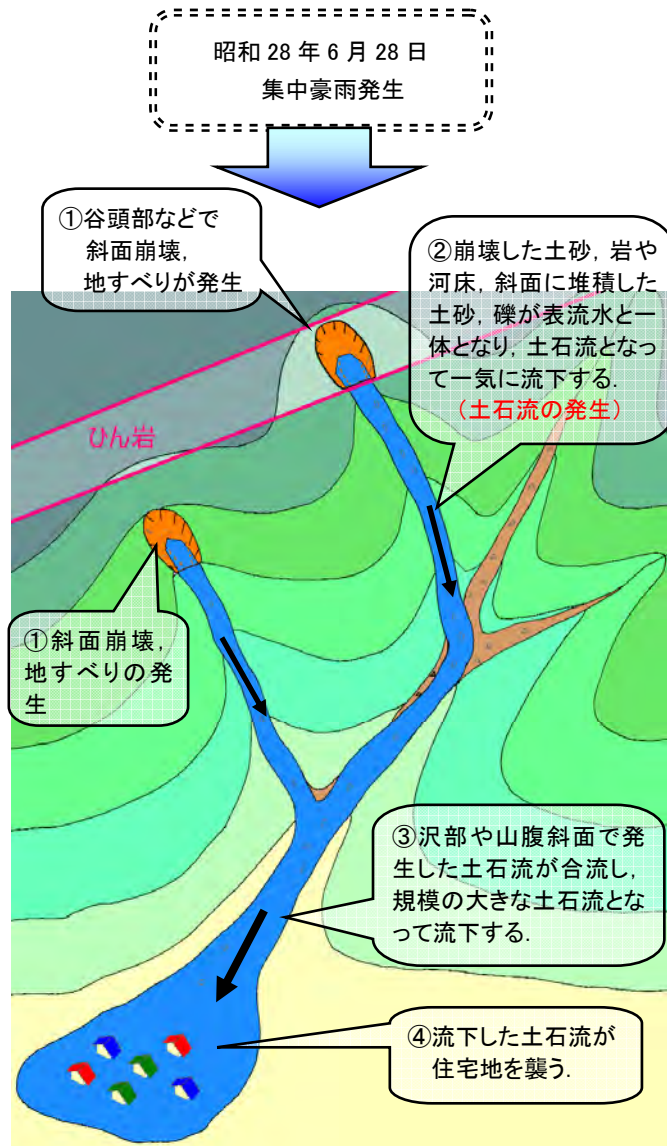
(3) 土石流発生過程

① 集中豪雨により、急斜面や谷頭部に位置する風化した花崗岩・ひん岩や流れ盤をなす関門層群で、山腹崩壊が発生した。

② 崩壊で発生した土砂が表流水とともに一気に急斜面を流下し、土石流となった。

③ 大小の沢や斜面で発生した土石流と、表流水が集まって激流となり、斜面や河床部に堆積している土砂、岩塊を流動化し、さらに規模の大きな土石流と発達していった。

④ 狭い谷の出口に集中した土石流は、山麓まで迫っていた住宅地を襲った。



白木崎川



藤見川

崩壊した斜面の状況

当時の調査記録(山崎達雄:1955)によると、風師山で発生した崩壊部の頂部には、風化したひん岩が認められている。植生は、高木はほとんどなく笹類が密生しており、裸地に近い状態であった。

4. 被害状況の記録

4.1 被害状況写真



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:朝日新聞社

白木崎を襲った土石流 家屋は倒壊し押し流された



撮影:毎日新聞社

土石流に襲われた白木崎川の惨状



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:朝日新聞社

巨石に覆われ荒野と化した白木崎の惨状



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:朝日新聞社

救出作業を見守る人々(白木崎地区)



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:朝日新聞社

電車道に流れ出た土砂(白木崎地区)



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:朝日新聞社

復旧が進む白木崎地区



砂防課所蔵

民家を呑み込んだ土石流(宗利川)



砂防課所蔵

民家を呑み込んだ土石流(葛葉川)



砂防課所蔵

災害直後の小森江東小学校と風師中学校



九州大学付属図書館所蔵，撮影：毎日新聞社

道路に横たわる流木



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:毎日新聞社
被災者に晴れ間がさす



砂防課所蔵

土石流により泥土や岩石に埋め尽くされた家屋(谷町付近)



撮影: 毎日新聞社

小森江地区の家屋倒壊現場



砂防課所蔵

土石流により倒壊した家屋(広石地区)



砂防課所蔵

壊滅した道路と家屋



砂防課所蔵

白木崎を襲った土石流 家屋は倒壊し押し流された



砂防課所蔵

泥で埋まった国道(清滝付近)



砂防課所蔵

民家を襲った巨岩



豪雨災害写真集(門市発行)、北九州市立中央図書館所蔵

土石流の惨状に呆然と立ち尽くす人々

復旧に掛かる
風師中学校



巨岩に押し潰される
風師中学校

復旧作業中の
小森江西小学校



出典：北九州市立図書館所蔵、「六月水害による公立学校被害状況写真集」（門司市教育委員会）



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:毎日新聞社

土石流に埋まる清滝町の惨状



九州大学付属図書館所蔵, 撮影:毎日新聞社

門司駅前の冠水



九州大学付属図書館所蔵, 撮影: 毎日新聞社

濁流が流れ込む関門トンネルの入口



九州大学付属図書館所蔵, 撮影: 毎日新聞社

大里方面での洪水

4.2 災害体験記

えっちゃんは死んだ

大蔵小学校 4年

前の日から雨が降りつづいていました。二十八日は日よう日だからお天気になればよいと思い、朝早く起きてみると、とてもはげしく降っていました。朝ごはんを食べて、お母さんと川の所に水を見にいきました。ぐんぐん川の水が土手をこして道に出てきました。

お父さんや、お母さんが近所の家が流れるとゆうので、かせいに行ったので、私と妹のえっちゃんがいっしょに、お母さんについて行きました。荷物をや



砂防課所蔵

っとかたづけました。お母さんは、家にちょっと帰り、私とえっちゃんだけまっていたら、お父さんが「すず子、えつ子」とよんだので、私とえっちゃんは走って行きました。お父さんはだまって、えっちゃんだけおんぶして足早に行ってしまいました。私は「お父さん……」と、泣き出しました。お父さんはだまっています。前の家から小山田のおいちゃんが来て、家までやっと、つれて帰ってくれました。それから水はとってもふえて、みるみる道が川のようにになりました。

ざい木が、どっどっど流れてきます。山羊がよろけるようにおし流されて行きました。

私は、恐ろしくてたまりませんが、まわりは水が一ぱいで、にげられません。家に中で、お母さんの手にすがって泣いていました。

少したって水がへったので、伊藤のおじさんにおわれて、中の方の畑迫の家にひなんさせてもらいました。お父さんや、えっちゃんはどこにいるか分かりません。しばらくして、お父さんだけは石の上に、たすけられていました。お父さんは体中けがをしていました。

えっちゃんはいません。きょろきょろあたりをさがしていると、近所の人が、えっちゃんは水の中を流れていったというのです。胸がどきっとし、いきが止ったかと思いました。お母さんと二人で声を上げて泣きました。

えっちゃんが見つかったといわれるまでは、だれかが助けてくれているような気がしていましたが、夕方六時ごろ、病院から死んだしらせがあったのです。私は大声あげて泣きました。お母さんも泣きました。屋ごろまであんなに、にこにこ私と遊んでいたえっちゃん、えっちゃんが死んだなんて思われません……が、えっちゃんはいないのです。「えっちゃん、えっちゃん」私は川に向かって、なんども、なんども叫んでみました。

昭和 28 年北九州大水害写真集(北九州市)転載

あっ、山が落ちてくる

人間は愚かなもので、一寸先は闇といいながらも、自分だけは災難とは関係はない、いつもまさかまさかと考えがちである。

あの日もそうだった。当時、我が家は広石の高台で旅館をしていた。お客を送り出して後片付けが済んで、昼食の用意をと思っていた頃、降り続いていた雨はまるで白煙のように激しく降っていた。

筑後川や白川の洪水に胸を痛めながらも、門司はそのような川のないこと、またいままでも災害のなかったことなどで、絶対安全と信じていた。



砂防課所蔵

そのうちに、上の教会へ行く石

段を濁流が走り出して、まるで川のようになり、日曜の礼拝に来ている人達が帰れなくなったようである。家の周りを見て回った父の「どうもきょうの雨はおかしいぞ」と言う言葉に、母は孫を背負って電車道まで下りた。それでもまだ不安を感じなかった。と、その時、隣の料亭の裏崖が大音響と共に崩れた。教会からの悲鳴「逃げろ！」父の大声。電車道までどうして駆け下りたか覚えていない。

もうその時、土石流が電車道に流れ出し、二台の電車が立ち往生していた。人々が市役所へ逃げるのでついて走った。

走りながら山を見上げたその時、「あっ、山が落ちてくる！」。空気まで茶色に見えたその瞬間、山が激しく崩れ落ちた。あれが山津波というものであったのか。30年過ぎたいまも脳裏に焼きついている。

楠木町のYMCAに行っていた妹が、わずかな距離を4時間余りかかって帰って来て毎日新聞社前の惨状を伝えた。

悲報は次々に続き、一家全滅の話、瞬時にお寺が消えた話等々、被害の大きさをまざまざと感じた。

災害に対して無関心で安易な気持ちでいたため、何一つ持ち出せず梅雨寒の夜を、知人の暖かい差し入れの毛布にくるまって、市役所で夜を過ごした。

夜明けを待って、いつまた崩れるかわからない山を気にしながら泥の中を這って我が家へたどり着くと、なんと無残。巨石が座り、土石流で埋まってしまって、これが我が家かと、ただただぼう然となった。

災害は忘れた頃にやって来るという言葉が、胸に激しく突き刺さった水害の思い出である。

5. 復旧状況

5.1 砂防施設の建設計画

福岡県では「門司大災害」を受け、昭和 28 年 9 月に福岡県門司砂防事業所を設置して、門司地区を中心に小倉・八幡地区を含めた砂防事業の施行に当たった。その後、昭和 36 年度に事業の進捗は 90%に達し、昭和 37 年 4 月に門司砂防事務所はその役目を終えた。

この間の砂防事業は、門司地区の 9 河川を中心に 26 溪流に及び、えん堤工 130 基、床固工 131 基、流路工 4,611m、山腹工 98 箇所を施行した。当時の総事業費は 7 億 5,200 万円で、現在の事業費に換算^{注2)}すると 39 億 9 千万円に達する。

門司地区の砂防事業

番号	河川名	工 作 物					
		えん堤工 (基)	床固工 (基)	帯 工 (基)	流路工・ 水路工 (m)	擁壁工 (m)	山腹工 (m ²)
1	本川	15	1	—	96.5	160.0	12,236
2	栄川	9	10	5	425.5	413.5	8,516
3	清滝川	11	1	1	134.0	115.5	11,608
4	白木崎川	12	8	—	190.5	192.5	1,917
5	葛葉川	8	10	—	291.0	—	—
6	藤見川	5	7	—	197.0	12.0	—
7	小森江川	1	—	—	—	—	—
8	羽山川	1	6	—	—	—	132
9	大川	10	17	12	422.0	198.0	12,295
計		72	60	18	1,765.5	1,091.5	46,704

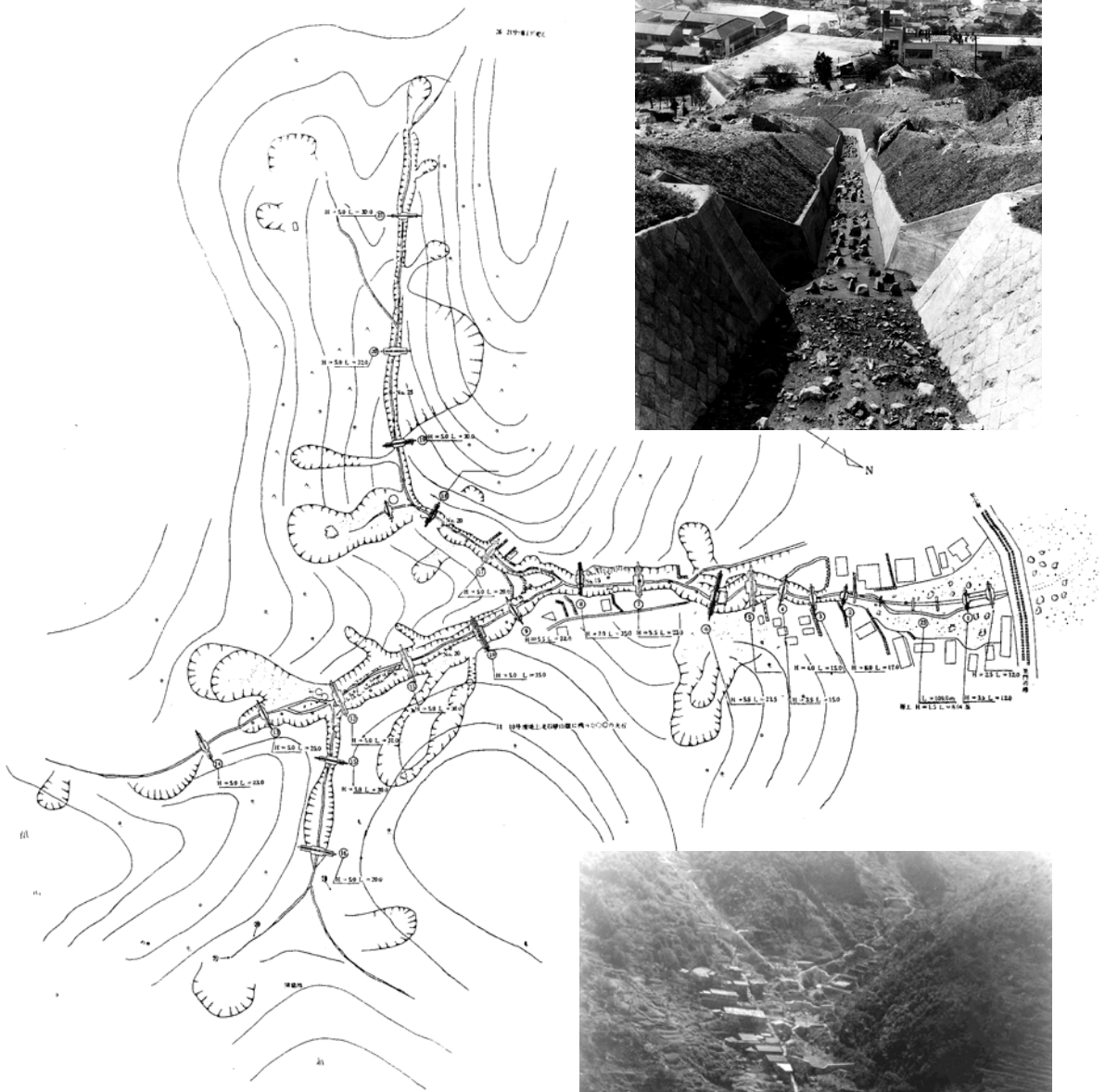
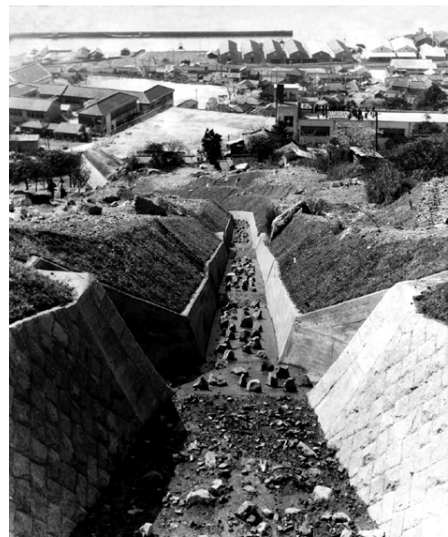
出典:福岡県砂防 50 年誌(土木部砂防課),平成 8 年 2 月

注 2) 治水事業費指数(砂防):国土交通省河川局(平成 14 年 12 月)

白木崎川砂防工事全体計画平面図

(昭和 28 年西日本水害調査報告書：土木学会西部支部より)

流路工▶

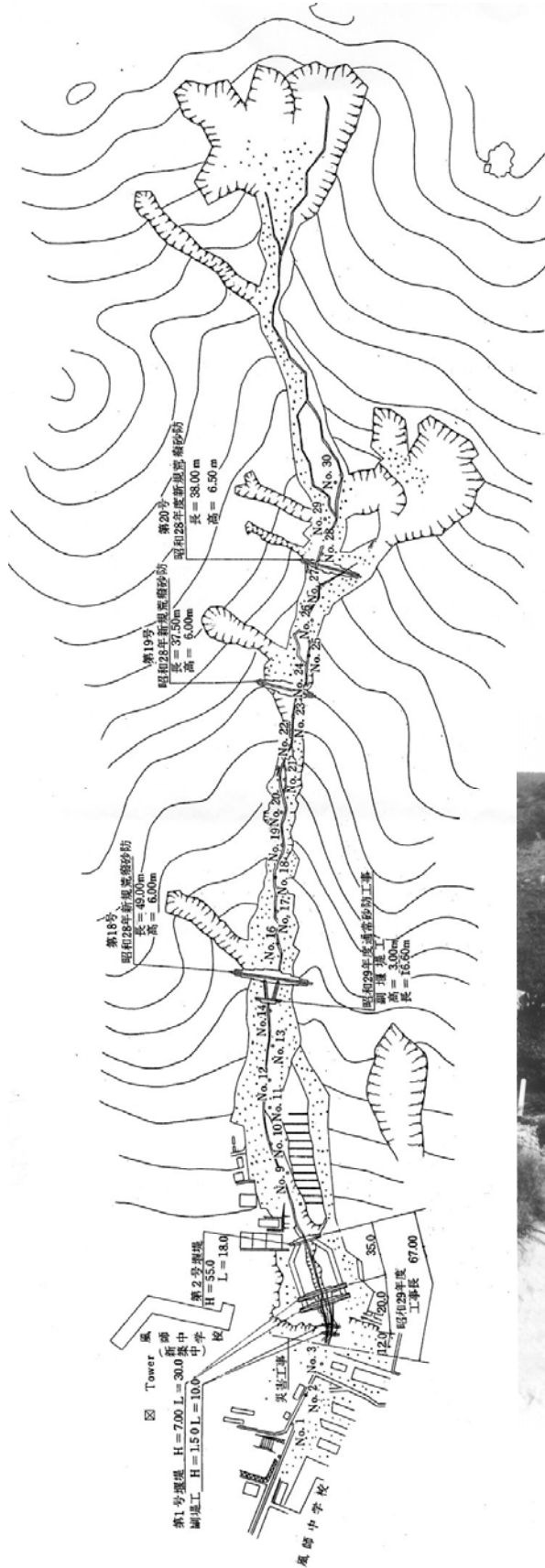


工事が進む白木崎川▶



藤見川砂防工事全体計画平面図

(昭和28年西日本水害調査報告書：土木学会西部支部より)



▲工事が進む藤見川



工事が進む風師山



◀ 白木崎川の流路工

5.2 砂防施設の現状



◀ 清滝川の砂防ダムから望む
関門海峡



▲ 清滝川の砂防ダム



▲ 絹川の砂防ダム



▲ 長谷の急傾斜地崩壊対策事業



▲ 現在の白木崎川

5.3 災害当時との比較写真



撮影：毎日新聞社

門司港と山津波の爪痕が生々しい風師山



発展する門司港と緑豊かな風師山



撮影: 毎日新聞社

災害直後の門司市街と茶色に濁る門司港



現在の門司市街と門司港



撮影: 西日本新聞社

風師山の山津波痕



現在の風師山(手前は海峡ドラマシップ)



撮影:西日本新聞社

山津波が襲った小森江東小学校周辺(中央左は建築中の風師中学校)



現在の風師中学校と小森江東小学校周辺

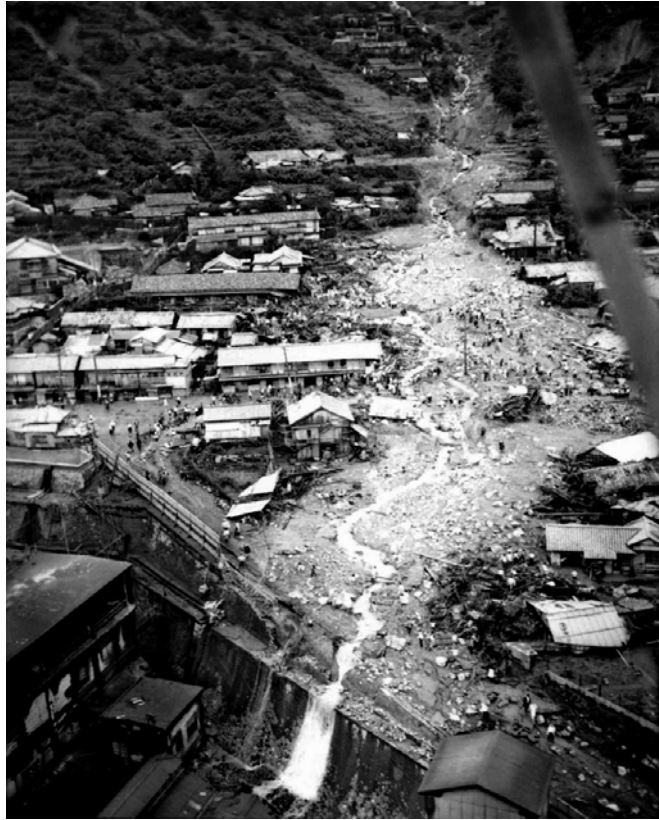


撮影:毎日新聞社

海から見た風師山の山津波痕



現在の風師山



撮影:毎日新聞社

山津波で家屋が押し流された門司区白木崎の惨状



緑に包まれる現在の門司区白木崎



撮影：毎日新聞社

土石流による風師山広石付近の惨状



現在の風師山広石付近(左端は門司区役所)



撮影:毎日新聞社

門司区広石付近の惨状



現在の門司区広石付近



撮影：毎日新聞社

民家を押し流し、国道まで達した土石流と立ち往生する路面電車



現在の広石地区



撮影:毎日新聞社

土石が流れ込んだ小森江東小学校裏



現在の小森江東小学校裏



砂防課所蔵

土石流で埋まった葛葉川の惨状



現在の葛葉川

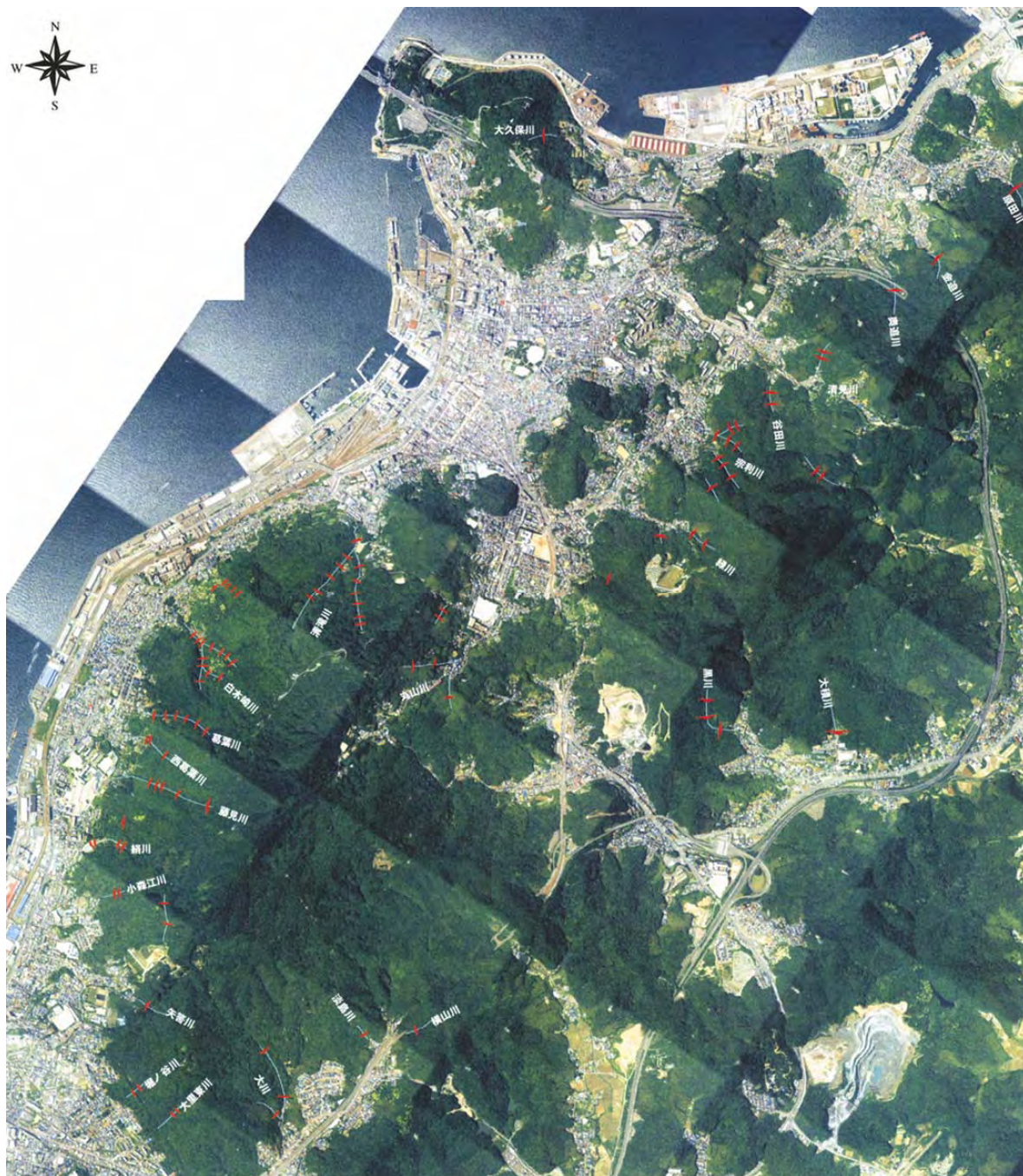


砂防課所蔵

土石流で埋まった葛葉川の惨状(対岸は下関)



河道が整備された現在の葛葉川



風師山周辺の主な砂防ダム

6. 門司大災害の記憶をたどる写真・資料展

平成15年(2003年)は北部九州を襲った昭和28年の大水害から50年の節目に当たる。死者・行方不明者143人という福岡県政史上最も大きな災害となった門司大災害から50年を迎えるに当たり、災害の記憶を風化させず、また、過去の災害を現在及び将来の教訓とするために、福岡県土木部と福岡県砂防協会が共催して平成15年6月の砂防月間に北九州市内で【公開講演会】と【昭和28年「門司大災害の記憶をたどる写真・資料展」】を開催した。「写真・資料展」は6月9日から11日間、3つの会場で実施し、多くの方々に来場頂いた。

昭和28年「門司大災害」の記憶をたどる写真資料展

あの日から50年

～土砂災害を忘れないために～

昭和28年6月28日に北九州地方を襲った記録的な豪雨により、市内は一瞬のうちに濁流に呑み込まれました。この災害により門司区全体では死者139名、行方不明者4名、被災家屋15,910戸の大被害を受けました。この「門司大災害」から50年を迎える平成15年8月に、土砂災害の恐ろしさを改めて住民の皆様を理解して頂くと共に、60余年に及ぶ土砂災害への取り組みを広く市民の皆様を知って頂くことを目的に公開講演会、パネル展示会を実施するものです。



公開講演会

入場無料

地元の方々、行政担当者、土木技術者等を対象に、土砂災害の恐ろしさと災害対策の現状、住民の皆様の日頃から心がけていただきたいことなどについて講演を行います。

日時：平成15年6月11日(水) 13:00～16:00

場所：ステーションホテル小倉4階：豊饒の間

内容：(1) 岡本 正男 国土交通省河川局砂防部「安全と環境の21世紀」
(2) 久保田 哲也 九州大学助教授「土砂災害予測の現状」
(3) 今村 元市 「災害体験者による門司災害の記憶」

パネル展示・ビデオ上映

入場無料

昭和28年当時の災害記録、現在の砂防施設の整備状況と役割、福岡県の砂防事業の役割について、パネル展示、災害ビデオ上映などを行います。

<各会場10:00～19:00>

JR小倉駅JAM広場……………平成15年6月9日(月)～13日(金)

門司港レトロスクエアセンタービル1階…平成15年6月14日(土)～15日(日)

JR門司港駅2階大ホール……………平成15年6月16日(月)～19日(木)

■主催：福岡県土木部砂防課 ☎(092)643-3679 ■共催：福岡県砂防協会 ■協力：北九州市

●ステーションホテル小倉



●JR小倉駅JAM広場 ●JR門司港駅、門司港レトロスクエアセンタービル



6.1 写真・資料展

①JR小倉駅JAM広場

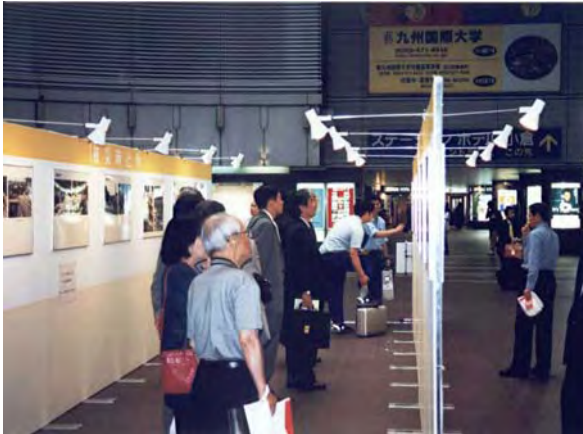
<平成 15 年 6 月 9 日～13 日(5日間)>



小倉駅JAM広場



受付



パネルの展示状況



パネルの展示状況



広報映像の放映状況
(小倉駅マルチビジョン)



アンケートの記入状況

②門司港レトロスクエアセンタービル
 <平成 15 年 6 月 14 日～15 日(2日間)>



門司港レトロスクエアセンタービル



受付



パネルの展示状況



パネルの展示状況

③JR門司港駅大ホール
 平成 15 年 6 月 16 日～19 日(4日間)



JR 門司港駅



ホール入口



受付とパネルの展示状況



パネルの展示状況

6.2 公開講演会

日時：平成 15 年 6 月 11 日

場所：ステーションホテル小倉

内容：①「安全と環境の 21 世紀」

国土交通省河川局砂防部 砂防部長 岡本正男

②「土砂災害予知予測の現状」

九州大学大学院 助教授 農学博士 久保田哲也

③「災害体験者による門司災害の記憶」

今村元市



国土交通省 岡本砂防部長 講演



全国治水砂防協会 大久保理事長 挨拶



九州大学 久保田助教授 講演



災害体験者 体験談



会場風景



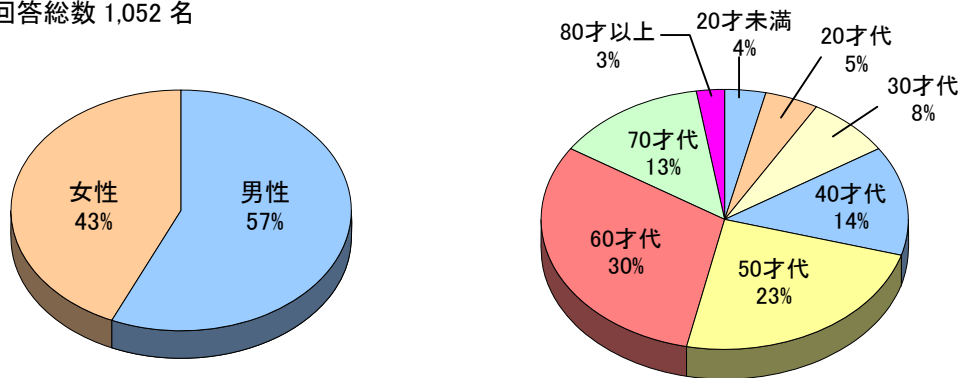
会場風景

6.3 アンケート調査結果

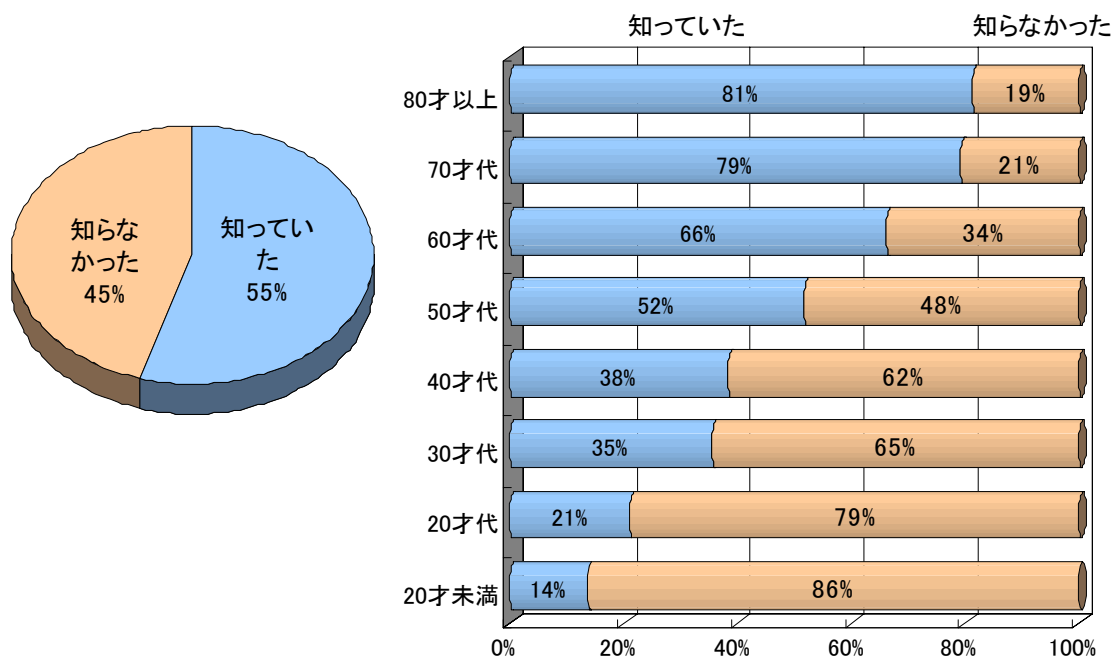
門司大災害のパネル展示会場でアンケート調査を実施し、11日間で1052名の回答を得た。アンケート調査結果によると、回答者は昭和28年災害を体験された50才代以上の方々が70%を占めている。会場には、門司災害を体験された方、肉親などから話を聞かれた方などが多く来場され、今でも当時の生々しい記憶が残っている様子が伺えた。門司災害に関する認知の度合いは、年齢が下がるに従って急激に低下しており、50年の歳月によって、災害の記憶が風化している可能性が示唆される結果となった。

■アンケート回答者の年齢・性別

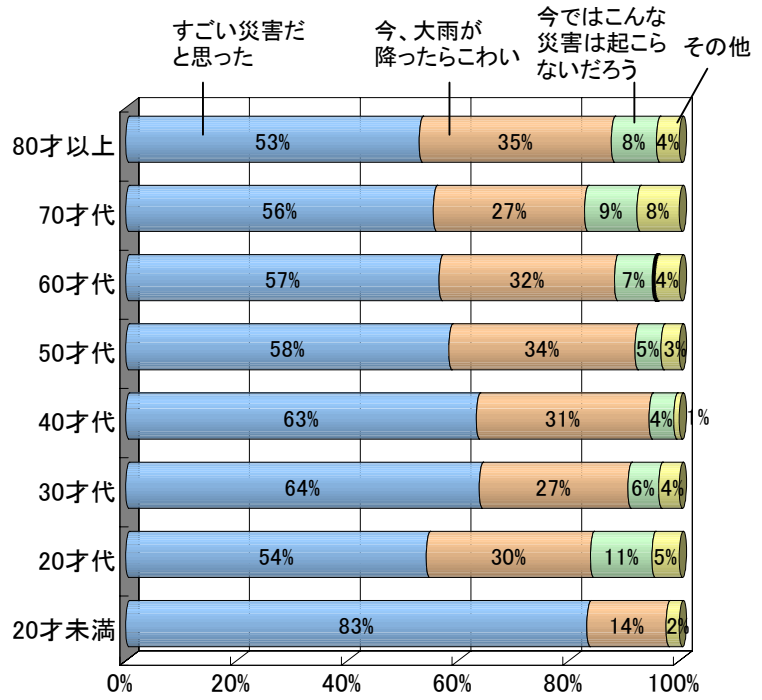
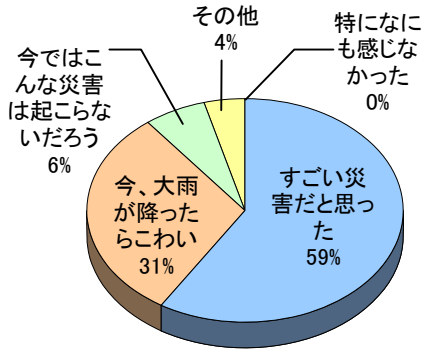
回答総数 1,052 名



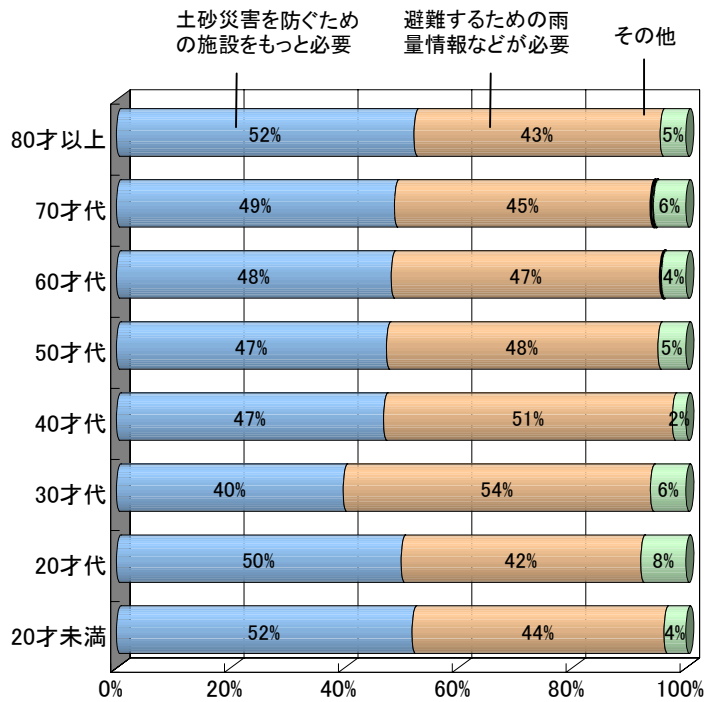
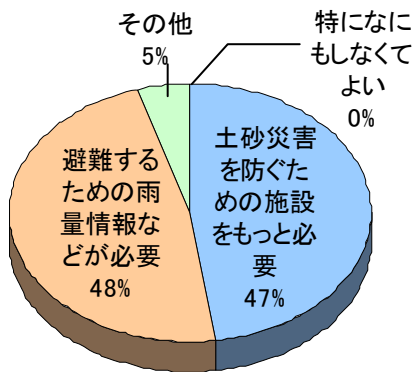
■門司大災害についてご存知でしたか



■写真資料展の感想について



■今後必要なことは？



おわりに

「門司大災害」については、20年前の昭和58年に北九州市において水害写真展や水害殉難者慰霊祭などの「北九州大水害30年事業」が実施され、「昭和28年北九州大水害写真集」としてまとめられている。

今回、災害から半世紀を経て改めて災害写真展を実施するにあたり、当時の写真・資料を収集し、当時との比較写真を撮るために現地を訪れた。現在の北九州市門司区は、大正時代に建築された門司港駅や当時の洋風建築物が多く残る観光地で、門司港レトロとして全国から多くの観光客が訪れる。風師山周辺は災害後に数多く設けられた砂防えん堤も緑豊かな山容に隠れ、今では関門海峡を望む静かな住宅地に戻っている。

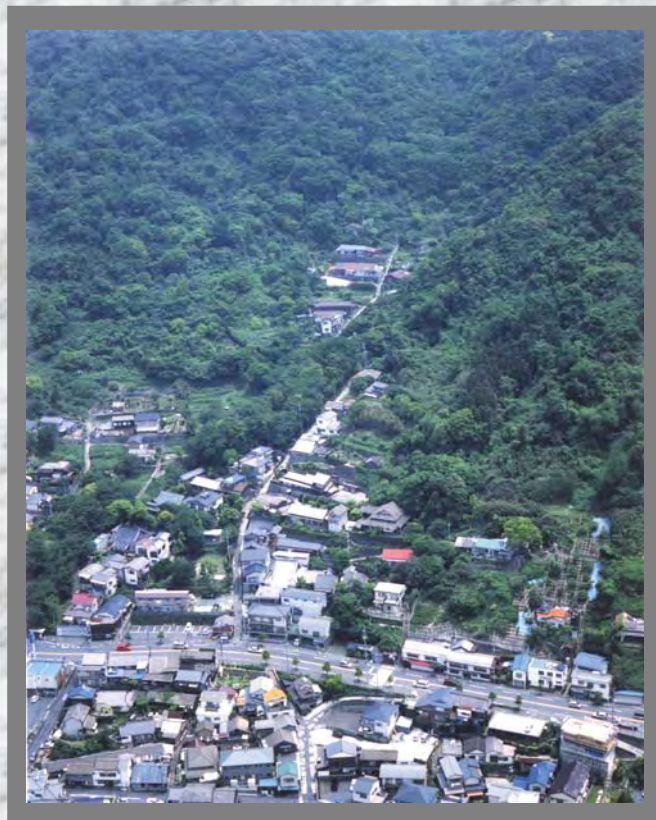
今回、写真・資料展を小倉駅、門司港駅などで11日間にわたって実施したが、市民の方々の反響が大きく、アンケートには当時の生々しい記憶も多数寄せられた。本文中に2編の当時の災害体験記を掲載しているが、被災の記憶は今も市民の人たちの心に深い傷跡を残していることをあらためて認識させられた。

今回収集した資料は、その多くを北九州市役所、北九州市立中央図書館から借用した。また、当時の写真は福岡県土木部砂防課で保管している写真を始め、九州大学中央図書館、朝日新聞西部本社、毎日新聞西部本社、西日本新聞社の協力を得て収集を行ったものである。ここに記して、あらためて感謝の意を表したい。

平成16年3月

参考資料

- 1) 門司市,「豪雨災害写真集」,昭和28年8月
- 2) 小倉市,「大水害写真グラフ」,昭和28年10月
- 3) 土木学会西部支部,「昭和28年西日本水害調査報告書」,昭和32年
- 4) 北九州市,「昭和28年北九州大水害写真集」,昭和59年3月
- 5) 福岡管区気象台,「福岡の気象百年」,平成2年1月
- 6) 福岡県土木部砂防課,福岡県砂防協会,「福岡県砂防50年誌」,平成8年2月
- 7) 福岡県土木部,「門司災害写真集」



昭和 28 年 6 月 28 日門司大災害の記録
あの日から 50 年

2004 年 3 月 発行

監修・発行 福岡県土木部砂防課

住所 〒812-8577

福岡県福岡市博多区東公園 7 番 7 号

TEL (092)643-3679

編 集 西日本技術開発株式会社
